

マンスリー

サンズ・トーク(56)

2013.7.1

木村 讀

御宿の海女が江戸時代、世界への窓を開いた

今、海女ちゃんがテレビで人気になっている。日本の三大海女地帯は千葉・御宿、志摩、舢倉島といわれるが、御宿の海女は江戸時代、同地で遭難したスペイン船の乗員を助け、これがメキシコ、スペイン、ローマと日本が交流する端緒になったのだ。



御宿海岸の砂浜

スペイン船サンフランシスコ号の遭難

慶長14年(1609)、フィリピン総督を乗せたスペイン船サンフランシスコ号が、メキシコへ向かう途中、台風に遭遇して御宿の岩和田浜に座礁沈没し、乗員373名のうち317名が救助された。



スペイン船が難破した岩和田浜

岩和田は、漁民三百人の寒村だったが、海女らは、衰弱した乗員の冷え切った体を抱いて温めたり、皮膚をこすったりして蘇生回復に努めた。

総督以下の難民は、大多喜藩主松平忠朝の庇護を受け、徳川家康、秀忠にも謁見を許され、翌年、幕

府がウィリアムアダムスに作らせた帆船で、無事メキシコに帰ることができた。



岩和田にある日西墨交通発祥記念碑

この彫像は、遭難し、衰弱した船員を海女が介抱している情景である。慶長16年にはスペインからお礼の使節が来日して、家康らに感謝の意を伝えた。

これより前、慶長5年、ウィリアムアダムス(英)は、オランダ船リーフデ号で航海中、大分の臼杵に漂着、ヤンヨーステンとともに家康の外交顧問となり、三浦に領地を貰って三浦按針と称した。造船術の知識があったので、伊東で80トンの帆船を作り、次に外航が可能な120トンの船を完成していた。家康は、この外航船をスペイン船難民の帰国に貸与したのである。

伊達政宗が支倉常長を遣欧使節として派遣する

この物語は、慶長18年、伊達政宗が家康の了解を得て、メキシコ、スペイン、ローマに支倉常長通商使節を送ることに繋がってゆくのである。使節団は、スペイン船救助のお礼に来日した答礼使ビスカイノが建造した船に乗ってメキシコへ着き、さらにスペインのコリアデルリオに到着、スペイン国王やローマ教王にも謁見した。しかし、家康はその後、アジア諸国が西欧の植民地になるのを見て、キリシタン禁教に動き、やがて鎖国するに至って、支倉使節団は意味を失い、伊達政宗の通商にける野望は実らなかったのである。それでも、現在、セビリア周辺には、現地に残った使節団の武士の末裔が多数、ハポン(日本)という名を名乗り、誇り高く日本人の伝統を残しているのだった。

今年は日本スペイン交流四百周年にあたり、皇太子がスペインを訪れるなど官民の交流を深めている。